

日本記者クラブ会報

一九九一年九月二十七日 研究会

ヤブリンスキー案で改革を



セルゲイ・V・ブラギンスキー
横浜市立大学助教授

七月十一日のこの研究会で『ソ連経済の危

機の実相と三つの改革案』についてお話し、本日またここで講演することになるとは、夢にも思っていないませんでした。私は七月十六日にモスクワに帰って、九月八日に日本に戻ってきたんですが、その間にソ連の情勢が大きく動いたわけです。いま、前回の記録版をめぐって見て、何か変なことを言わなかったかな、とちょっと気になっているんですが……。そんなに私の予測は狂わなかったと思うんですが……。

●ソ連報道で気になること●

前日も、本題に入る前に日本のソ連報道で気になっていることを一、三点指摘したんですが、きょうもそのことから入らせていただきますと思います。

その時は、エリツイン・ロシア共和国大統領を巡る報道で若干気になったことがある、

バランス感覚を大切に

と申し上げました。つまり、エリツインが直接投票によって初めてロシア共和国の国家元首に選出されたという事実をもう少し重く見た方がいいのではないかと申し上げました。エリツインに対する日本のマスコミの対応が冷た過ぎるような感じを受けて、私は一生懸命エリツインを持ち上げていたんです。当時はゴルバチョフ一色で、エリツインに対してはかなり懐疑的な報道だったんですが、今回モスクワから戻ってみると全く逆で、今度はエリツイン一色で、ゴルバチョフに対する風当たりが非常に強くなっている。

エリツインは確かに今回のクーデターの時英雄的といえる行動をとった。彼の實力でクーデターが阻止され、八月革命が起きた。この事実は動かせません。そういう意味で、以前私がエリツインをもっと評価すべきだと言ったことは、繰り返しでもいいんです。

だからといって、エリツイン万歳というようなことではない。彼にも彼なりの欠点があります。また、連邦の大統領はまだゴルバチョフです。このことはソ連の政治運営についても大事ですけれども、日本のマスコミでのプレゼンテーションにとっても、やはりエリツインとゴルバチョフのバランスをとる、という感覚が非常に大事ではないかという気がするわけです。

もつと信念を貫いて

もう一つは、モスクワから戻ってきて、クーデターの時日本の新聞が何を書いたかというところに興味を持って見たんです。報道の内容にケチをつけるつもりはありませんが、一つだけ気になったのは八月二十日の時点で、早くもゴルバチョフの肩書きに「前」が付けられていたことです。ほとんどの新聞が「ゴルバチョフ前大統領」と書いて、クーデター側が逮捕された後も、何とパブロフは依然として首相なんです。まだ最高会議で彼の失脚が正式に決まっていなからそう書かざるを得ない、と判断したのでしょうが……。

これに関連して八月十九日、クーデターが起きた最初の日にレニングラード(現サンクトペテルブルク)のサブチャク市長が言ったことをご紹介したいと思います。宮殿広場でクーデター糾弾の集会が開かれて、一人のスピーカーが「プライムミニスターパブロフ」という言葉を使っただけです。サブチャクが隣に立っていたんですが、「ちょっと待った」と言って、「パブロフ前首相だ」と言っただけです。

つまり、彼は法律家の立場から、国家反逆罪であるクーデターを起こした時点からパブロフは首相と言われる資格はなくなりました。ヤ

ナーエフも当然大統領代行はおろか副大統領でもない、と言ったんです。クーデターを起こした時点で「前」が付くわけなんです。

この辺の認識のズレを感じたわけです。必ずしも日本のマスコミだけでなく、ロンドンのマダム・タッソーのろう人形館でも八月二十日にゴルバチョフには「Ex-President」と付けていたという話を聞きました。これは日本政府の対応についても言えることなんですが、もつと信念を貫いてはしなかった。

私がモスクワで各国の政府、各国のマスコミがどういうプレゼンテーションをして、どういう評価をしているかと聞いていた時に、一時、クーデター側がソ連全土を掌握したという情報が流れていたの、仕方がないからこのクーデター政権とも付き合わざるを得ないんじゃないか、という雰囲気生まれたようです。けれども、やはり民主主義を本当に信奉する国であれば、例えばイギリスのメジャー首相のような対応があってもよかったです。ではないかという感じが、その時したわけなんです。

二度とこういう事態が起こらないことを期待したいんです。いずれにしてもクーデターはクーデターと言うべきであるし、合法性をすんなり認めてしまうようなことはいかげなものか。これは別にマスコミについて言っ

いるわけではないんですけれども、一部の政党とかもヤナーエフが知日派であって、これで対日関係は良くなるのか、そんなコメントも見かけたんですが、ちょっとポイントがズレているな、という感じを率直に申し上げたわけです。

●クーデターに裏はなかった●

私はクーデターの見通しについて外れた、と思うんです。前回そういう話をここでしたかどうかよく覚えていないんですが、私は機会がある度に、クーデターはあり得ないと、今年の春からずっと言い続けてきたんです。その点では予測が外れたことを率直に認めなければいけない。

ただ、私がそう言っていたことの基礎にあった考え方はそんなに間違っていないかったです。つまり、私は保守派をもう少し頭のいい連中だと思っていて、成功の見込みのない行動はまずとらないだろうと思っていた。それが間違いであって、彼らは成功のチャンスが全くないということを理解していなかった。本当に意外なことでした。

八月十九日にクーデターが始まったんですが、その前日に例の八人組が集まって、軍隊を動員すべきかどうかという議論が交わされ

たそうなんです。その時、パブロフ前首相は、軍隊を導入する必要はない、非常事態を宣言すれば、最初の一週間ぐらいはゴチャゴチャになるが、その後はみんな納得して、われわれの方についてくれる、という見通しを示したらしいんです。一国の首相がこれだけ自国の国民を理解していないのは私にとっては非常に意外でしたし、パブロフはもっと頭のいい人間だ、と考えていました。

エリツインの逮捕命令とか、ロシアのホワイトハウスの襲撃命令とかは、クリュチコフ（KGB議長）やゾフ（国防相）あたりが出したらしいんですが、それも実行に移される可能性は、最初にその命令が出された時点から限りなくゼロに近かったわけなんです。組織の長が部下の気持ちをこれだけ分らないのも、私にとって大きな驚きでした。

このクーデターはあまりにもあっけなく終わってしまったので、何か裏があるのではないかと。そういうふうに見える向きもソ連の内外にあるわけですけども、事情を本当に知っている人であればあるほど、裏がないと言っているわけです。本当に単純で、要するにこんな頭脳しか持っていない連中がずっとソ連を支配していた。彼らは彼らなりに精一杯考えてクーデターをやったんですが、これで彼らの頭脳と実力の限界がみんなに分かる形

で示された。クーデターはそれに過ぎないと思います。

ロシア指導部にも混乱

だからと言って、改革派に素晴らしい体制ができていたのかと言うと、実は全然そうではない。ロシア共和国政府は、いろいろなことがある度に混乱していたんです。この事件の時も、私は部外者として見ていたんですけども、非常によく混乱の様子を観察できました。

要するに今回のクーデターは、三人の人間が死んでいなければ本当に喜劇としか扱えない事件だったんです。三人の人間が死んでしまったのと、それに続く出来事は、喜劇でもマンガでもなく、従来のソ連の権力構造の総崩れになってしまったわけですから、もちろん軽く扱えません。

しかし、ホワイトハウスの攻防戦とか、話し始めると笑い話みたいなのがたくさんあり、キリがないわけです。例えばエリツインの主な偵察部隊は暴走族であったこととか。バイクを乗り回した不良少年達が町中を駆け回って、どこにどういいう軍隊が集まっているかという情報を集めてきた。それが一番正確な情報だったわけです。

また、戦車が本当にホワイトハウスに襲撃

を開始しようとしているか確認するために、コマコンピルの二十七階にヤプリンスキー（現・ソ連国民経済管理委員会副議長）の政治経済研究センターがあるんですが、その見晴らしが一番いいんですが、ホワイトハウスから電話をかけてくる。「いま六十台の戦車がクトゥーゾフ通りからわれわれを日かけて進行中だという情報が入ったが、窓からのぞいてくれないか」と言う。窓からのぞいて、「そういう動きはない」と言うと、「そうか分かった」。そんな感じの情報収集なんです。要するに、そういう意味ではおもしろおかしな場面も少なくなかったわけですよ。

三人の死亡事件は不幸な事故

三人の人間が死亡した事件ですが、これは周辺の地図とかを見ると、衝突が起きたサトボエ環状線はバリケードがあったんですが、装甲車が走ってきた方向、そしてこのバリケードを突破して走ろうとしていた方向は、むしろホワイトハウスから遠ざかる方向にあったわけなんです。あれはどうもサトボエ環状線をパトロール中の三台の装甲車が司令官からバリケードがあることも知られないで、たまたま真っ暗な中、それにぶつかってしまった。

そこには非常に大勢の市民がかなり緊張し

て、興奮していたので、これはホワイトハウスの襲撃の開始じゃないかと誤解した。運転手の視界をさえぎるためにテントをかぶせ、アフガニスタン戦争の経験者が教えた方法なんです。装甲車にテントをかぶせて視界を封じたんです。

二台の装甲車はそこでおとなしく止まってくれたんですが、一台が暴走してしまって、人間をひいてしまったわけです。そのひかれた人間を助けようとして、もう一人の人間がひかれてしまった。「人間がひき殺されている」というざわめきが起って、火炎瓶が投げられて、兵士達が飛び出した時点で、もう一人の人間が射殺されてしまった。目撃者の話を総合して言うと、だいたいこんな感じだったんです。

肝心なのは、バリケードを突破すれば、サブウェイ環状線で、また別の方向に行くしかなかったわけですから、これは計画的なホワイトハウスへの襲撃の始まりであったとはとても思えないんです。むしろ不幸なアクシデント、事故であったと私は見ているんです。

結局、三日天下で終わってしまったんですが、その時のロシア指導部の行動には、細かいところでかなり混乱があったんです。しかし全体として、やはりエリツィン大統領、サブチャク市長の行動が非常に果敢で、非常に

適切であったと思います。

エリツィンに付きまとう疑問

エリツィンはよく過激派じゃないか、行き過ぎじゃないかと言われますけれども、率直に言って、私はその時彼が少し穏健すぎるという感じさえ受けました。特に八月二十日から二十一日にかけて、彼のところには十三、四台の戦車が彼の指令権を受け入れるということになっていた。もし私が彼の立場にいたら、その時点でクレムリンの襲撃を命令していたでしょう。

これは謝らなければいけないことなんです。私はその時、天安門事件のことが脳裏に焼き付いていた。いまモスクワに入っている軍隊では何もやれないということが目に見えていた。しかし、しばらく膠着状態が続いたら、この軍隊を別の軍隊と入れ替えて、その時こそ本格的な弾圧に踏み切るんじゃないか、と心配していた。だから、少しでも自分の言うことを聞く軍隊がいれば、専守防衛の姿勢にとどまらないで、積極的にクレムリンの連中に攻撃をかけた方がいい、と考えたんです。しかしさすがにエリツィンはそうしないで、平和的にこの事態を解決できた。脱帽するしかないです。

その後の彼の行動も非常に適切だったと思

います。国境の話を持ち出すなど、失言は多少ありましたし、ゴルバチョフ大統領がモスクワに帰ってきて、ロシア共和国の最高会議で演説する時のエリツィンのおごりの態度は本当に見ていられなかったんですが……。精神が高揚していたとはいえず、目に余る態度をとったことは良くないんですけども……。

ただ、彼の実際にとった政治行動には、それはあまり影響していないと思います。これはエリツィンについてずっと付きまとう疑問で、彼のしゃべり方、態度を見てみると、この人はどうかかなと思わせるような場面が少なくないんです。しかし、いざ行動となると彼は非常に慎重でして、少なくともこれまでの行動で本当に批判されるべきことはやっていない、と思います。

軍隊をストップさせた大統領令

あと二つ。一つは今回のクーデターはもともと成功の見込みがなかったとはいえず、一応戦車は市内に入ったわけですが。第三世界のどこかの国であれば、おそらくそのまま軍が実権を掌握することになっていたと思うんです。エリツィンの政権は、当時はまだ紙の上の政権であって、戦車に対抗するために彼はどういう手段を持っていたかと言うと、これは突き詰めて言えば、大統領令という紙切れしか

なかったわけです。

しかし、この紙切れこそが軍隊の心を動か
し、軍隊が行動まひに陥って、結局紙切れの
前にストップしてしまった。ということは、
七十数年間、全く法を無視した独裁政権を敷
いていた国が、信じられないくらい早いスピ
ードで法治国家の概念が根付いてきた。この
証しになったと、大変うれしい思いをしまし
た。ルーマニアみたいになって、結局クーデ
ター側は倒れるけれども、大惨事になる可能
性もあると思っていた。そうならなかった先
進国ロシアの誇りを、その時感じたわけです。

一味違ってきた言論の自由

もう一つ。それまでも言論の自由はかなり
進んでいましたが、やはりクーデター失敗後
の言論の自由は一味違うな、という感じがし
ました。特に印象的だったのはロシア直属の
国营テレビです。ロシア国营テレビとかロシ
アの新聞が、クーデターが失敗した翌日から
いろいろ細かいところでエリツインの批判を
始めたんです。

特に八月二十三日でしたか、ゴルバチョフ
がロシア最高会議で発言した時に最高会議の
代議員から全く失礼としか言えない質問を受
けたり、エリツインも「ちょっと息抜きに」
と言って、「共産党活動停止の大統領令にこ

れから調印するぞ」と言って、ゴルバチョフ
が演壇に立った時、「ちょっと待ってください
い」と言った。あれは本当にゴルバチョフも
惨めだったし、エリツインもそんなことをし
ない方がいいとみんな思っただけです。それを
ちゃんとソ連のマスコミは指摘して、エリツ
インは英雄だけれども、こういう態度はけし
からんということをちゃんと書いていた。そ
んなことが非常に印象に残りました。

ソ連政治家の失言の掲載を

一般的に言っても、ソ連のマスコミはいま
非常に面白くなっています。先日ハスプラト
フ・ロシア共和国最高会議長代行、彼もク
ーデター弾圧の時の英雄の一人なんですけれ
ども、彼がここで記者会見をやりましたね。
その時、いろいろ問題発言をしたんですが、
ほとんど日本の新聞は載せなかった。

領土問題について彼は何を言ったかとか、
経済支援について彼が何を言ったかとか、ほ
とんど中身の無い話だったと思うんです。そ
の中身の無い話の中で、何を言ったかという
ことは一応報道しているんですけども、一
番彼の記者会見で面白かったのは、「ヤブリ
ンスキーを日本に引き渡してもいい」と言っ
た部分なんです。その辺はほとんどこの新
聞にも載らなかった。

ところがイズベスチヤはちゃんとそれを全
部載せている。見出しも『ハスプラトフはヤ
ブリンスキーを日本に引き渡すことを明言し
た。島の代わりに』と。そういう皮肉たっぷ
りの見出しを付けて、非常に面白く書いてい
るんです。日本のマスコミは、堅い報道ばか
りじゃなくてその辺の面白みが入ればいい。
彼が自分で言ったわけですから。

憶測で書くことは失礼になるけれども、彼
の言葉を引用する形でソ連のマスコミは書い
ているわけですから、引用だけでかなり面白
い文章になる。そういうことも今後やったら
いいのではないかと思うんです。そういった
ソ連の政治家の失言は、これからもたくさん
出てくると思います。だからこれが最後のチ
ャンスではないと思うんですが。

●経済同盟条約と改革プログラム●

クーデターとその事情の話はこれくらいに
して、何かあったら質疑応答にゆだねたいと
思います。「ソ連経済の危機の実相と三つの
改革案」という題で七月にお話をさせていた
だいたんですが、クーデターと八月革命を受
けて、それがどういうふうに変ったか、と
いう話を少ししたいと思います。

危機の実相に関しては、ほとんど何も変わ

っていないので、特に付け加えることはないかもしれません。ただ潜在的にもう一つの懸念材料が生まれたということだけです。全体主義的な国家が倒れたことは、政治的には大変いいことであって、歓迎すべきです。

けれども、経済の観点から言うと、連邦解体は必ずしも諸手を上げて歓迎することではない、と思います。ソ連経済の危機の状態については、むしろ八月の事件でもっと懸念材料が増えた、というのが実情であるわけです。しかし、その反面、改革の方にもはるかに大きな希望が生まれたことも事実ですから、とりあえずそこから入っていきたいと思います。

七月の時点では、三つの改革案があると申し上げたと思います。一つは当時のパブロフ内閣主導型の市場経済移行。つまり、かなり強い中央の統制を残しながら、徐々に漸進的に市場経済に移っていくというやり方。二つ目が急進的なロシア共和国主導型のやり方で、中央機関の実質的な解体とスピーディーな市場経済の導入。

それから三つ目の案として、市場経済に抜本的に乗り換えていく点ではロシア共和国の案と基礎は一緒だけれども、それを中央政府の機能を残しながら、しかも例えば西側の支援が得られるならば、中央を統一的な窓口として残しながらやっていくヤブリンスキー案。

この三つがあったわけでは、

前回の私の見通しでは、何らかの形で三つの案の妥協が成立する。お互いに妥協しながら漸進的に改革を進めていくだろう、という見通しを持っていたわけでは、もしこのクーデターが起きなければ、おそらくそういう方向で進んでいただろうと思います。

しかし、保守派が耐えかねて行動に出してしまったわけですから、最初のパブロフ内閣の主導の下、つまり中央の統制を残しながらの漸進的な市場経済改革案は、完全に葬り去られてしまったわけでは、

良識改革派と無謀改革派の対立

これまで四つくらいのグループがあった。

一つは市場経済そのものに拒絶反応を示す超保守派や強硬派。自分達の権力は残したいけれども、新しいゲームのルールの下でやってみようという穏健な保守派。それからヤブリンスキーが代表するような良識的な改革派。

そして名前は挙げませんが、一部のロシア共和国の政治家が代表するような無謀な改革派。この四つがあったわけでは、結局クーデターを起こしたのは強硬な超保守派だったわけですが、パブロフ前首相を含めて一部の穏健保守派もそれに巻き込まれてしまっただけで、これで彼らの影響力はとりあえずゼロに

なってしまうたわけでは、

私の以前の展望ですと、この強硬派と無謀派を切り離して、穏健な保守派と良識ある改革派が手を組んで国を指導していくと思っただけですが、クーデターがこれを全く変えてしまった。結局ゴルバチョフより右はなくなっただけという状況にいまなってしまうわけでは、そこで残ったのは、二つの改革案と二つのアプローチで、良識ある改革派と無謀な改革派の間の対立がいま非常に強く表面化しているわけでは、

なぜ一部の改革派を無謀と呼ぶかと言うと、もちろん国のことよりも自分達の地位、自分達の政治的な野心しか考えない、という側面もあります。しかし何よりも経済のことを分かっていないくせに、経済政策に対して責任をとろうとしている、そういうことに私は無謀さを見いだすわけなんです。

E C 型共同体にはならない

各共和国がみんなバラバラになって、そして全体主義的な経済体制を完全に解体して、別々に出直した上で、また数年後に再統合しましょう。とりあえずは九二年の統合前の E C 共同体のような体制にしましょう。理論的には申し分のない話ですが、ただこれはソ連経済の現実を全く見ていない、全く見ようと

もしない考え方であると思います。

その理由に関しては、私も何回かすでに新聞とかで書くチャンスがあったので、繰り返してしまってもいいかもしれませんけれども、ECの場合は、基本的には市場経済であって、市場のインフラストラクチャーもある、競争環境も整備されている、それから物価形成メカニズムも市場メカニズムであるわけです。ソ連では全くそれらがなくて、これからそれを導入しなければいけない。これが一つの大きな違いです。

それからECはそれぞれの国が我慢できる程度の財政赤字を持って、しっかりした金融政策を持っている。けれども、ソ連は前代未聞の財政赤字と過剰流動性を抱えて、マクロ経済の危機が非常に進行している。

三番目は、これこそ一番大事な点であると思うんですが、ECの十二か国はもともと独立していた国で、それぞれの政府が経済政策の担当能力を十分持っているし、豊富な経験を持っている。しかし、ソ連の場合は専門的な人材はもともと非常に少ない。希少な上に、ほとんどすべての人材がやはり中央政府機構において、共和国政府は長年飾り物に過ぎなかった。特に経済の分野では全く実力を持っていないわけです。こういった危機的な状況の下で、共和国政府がマクロ経済政策を担当す

るとなると、年内にハイパーインフレに突入することは、この時点で断言できると思います。

共和国への移管はナンセンス

それから市場経済、市場経済と言いつつ、実際何をやっているかと言うと、いま共和国の指導者がやるうとしていくことは、連邦管轄の企業を共和国の管轄に移すこと。つまり、これまでソ連邦の企業であったのがロシア共和国の企業になること。ヤプリンスキーなんかは意見を聞かれると、「これ以上ばかかるとはならない」と言っています。

本当の市場経済を導入しようと思うんだら、連邦の企業でもなく共和国の企業でもなく、本来独立した法人企業にしなければいけないわけです。要するに一つの統一国家としてのソ連邦の官僚体制、中央指令型経済を十五の共和国の中央指令型経済に置き換えたところで、事態は全く良くならない。それどころか、かえって悪くなってしまうわけです。いま大事なことは、管轄が連邦にあるのか共和国にあるのかということよりも、早くそういう管轄を一切なくすることなんです。私的所をを導入して、競争環境を整備することなんですけれども、その前に共和国の指導者は共和国に管轄を移すことにはばかり気をとられて

いるわけです。

これも連邦政府が民営化と市場経済の導入の最大の障害になっていた時代には、ある程度ついていけた議論なんです。つまり、まず共和国の方に力を持って行って、共和国の管轄に移した後に、中央の政府がなかなかやってくれない民営化をやる、そういうあら筋があったわけです。しかし、いま中央政府からの障害はほとんどなくなったわけですから、共和国に管轄を移すのは完全にナンセンスになってしまいました。

連邦解体はデメリットばかり

あと産業構造の問題も加えなければいけない。非常に歪められた分業体制の中で、あっちこっちに小さい独占があって、一つの共和国に立地する一つの工場が非常に重要な財の生産のほとんどをしている、という事態が少なくないわけです。共和国がバラバラになってしまうと、お互いの供給体制がますますガタガタになって、生産がさらに落ち込んで、混乱が深まるだけの結果になってしまうわけです。

要するに全体主義国家イコール共産党支配体制であった時代には、私も連邦維持にはある程度懐疑的だったんです。しかし現在、連邦を解体するメリットはほとんどなくなっています。

かえってデメリットばかりが目立つようになってきたというのが私の認識です。

私は以前、ヤプリンスキーの連邦を維持して、ある程度中央集権的に経済改革をやらなければいけないという改革案は、下手すると全体主義国家の温存につながるんじゃないかという危惧を持っていました。しかしいまそれが一掃された中で、私は完全にヤプリンスキー案がいまある二つのアプローチの中で正しい、と思います。

二番目の経済改革案

五百日計画は、彼が作った最初の計画であり、ヤプリンスキー・アリソン案が二番目の改革プログラムであるとすれば、いま国家評議会に基本承認された経済同盟条約草案が、現在の状況に合わせた三番目の改訂版、つまり、クーデター後に出した新しい経済改革案である、と彼自身言っているわけです。

五百日計画もそうでしたし、ヤプリンスキー・アリソン案の場合も非常に強い保守派からの抵抗にあって、特に軍産複合体、共産党の幹部からは拒絶反応を示されたので、実行できるような態勢はなく、絶望的な状態にあったわけです。あの時点でもなお妥協せずに、ああいう改革案を出していたことは、彼の先見の明です。

いずれは保守派が自分達の墓穴を掘ってしまふから、こうあるべきだということを最初から妥協しないで示すべきだ、という彼一流の政治判断だったと思います。いままさにこういう障害がなくなつたわけですから、共和国の指導者が理性的な選択をして、まともなソ連経済の改革案であるわけです。

実行に移せるかどうかの見通しとなってきますと、いま非常に流動的で、何とも言えません。それぞれの確率をファイフティ・ファイティだと思っています。時代の流れからしてみると、どんどんバラバラになっていこうとしているような気がしないでもない。

おとといのファイナンシャル・タイムズでも、ヤプリンスキーに非常に好感を持っているジョン・ロイドが大きな記事を書いて、彼を「時の流れに逆らう非運な男」というふうに評価しているんです。ヤプリンスキーに対する好感に満ちた記事でありながらも、もう保守派の抵抗はなくなつたけれども、共和国が完全にバラバラになつてしまつたから、彼のやろうとしていることはまたタイミンクを逸してしまふんじゃないか、というようなことを言っているんですが……。

もちろんそうなる可能性は大いにあります。ただ、なぜ私ができる可能性を半分以上は見な

いかと言いますと、この流れに何も宿命的なことを感じないからです。何らかの形で経済同盟条約が締結されて、そしていまではこの経済同盟条約に少しでも修正が加えられれば、ヤプリンスキーは改革案は骨抜きにされるから自分は責任を取らない、と言っています。私が期待するのは彼の不満なところが盛り込まれても投げ出さないで、経済同盟の中央機関の政策責任者になって欲しいんです。

その後は、法律も大事ですけども、あくまで中央政府と共和国政府の実力の勝負になってくると思うんです。そういうことになったら、ヤプリンスキーと彼がまとめられる人材は、もう二段も三段も上です。彼らが改革の方針を示して、そして西側の支援も取り付けて、実際にソ連経済を正しい方向に向かわせることに少しでも成功すれば、政治的な状況もかなり変わってくるのが予想されます。その時こそ時代の流れをもう一度変えることができる、そういう雰囲気が生まれる可能性もある、というふうに私は考えているわけです。

しかし、見通しとしてはまだ何とも言えない状況で、どちらのシナリオになつてもおかしくないと思います。そのどちらのシナリオになるかによって、ソ連の市場経済移行のプロセスが決まる。いずれにしても市場経済と

市民社会にいくことはほぼ間違いないと思いますけれども、その道の長さ、険しき、そしてそれに伴うコストは大いに変わってくると思います。

みんな分裂して、専門的な知識も明確な行動計画もないまま、試行錯誤で市場経済に移行しようということで、いまのところ混乱、混乱と言われています。しかしこれが本当の革命ならば、この混乱は最小限にとどまっている、むしろそういうふうには評価すべきじゃないかと思うんです。

しかし、この革命が明確なプログラムなしに、試行錯誤で今後も続くとなると、いまの混乱は当分の間、さらに深まるであろうし、年率数パーセント、数千パーセントの超インフレになることも目に見えているわけです。そうなった場合に社会がそれに耐えられるかどうか。最悪の最悪になった時に、またどこかの時点で政治的におかしくなるという可能性も完全には排除できないわけです。その確率はそんなに高くないと思いますが、そういう危険性も出てくるわけです。

もう少しまくいって経済同盟条約が結ばれて、きちっとした行動、明確なプログラムを持つ政府ができて、かつ西側の支援を取り付けることができても、もちろんソ連経済は一挙に良くなるわけではない。一昼夜のうちに良く

なることはないんですが、ある程度コストを最小限にとどめて、近代的な経済制度と社会制度に脱皮していけると思います。

西側支援はあせらず冷静に

さて、そういった中で西側としていま何ができるか、そして何をすべきかということですが、もし第一のシナリオ、つまり共和国がバラバラになって、試行錯誤で市場経済に移行することになると、それは危機管理の側面からどこかの時点で何らかの手を打たなければならなくなるかもしれません。その時は基本的には模様眺めするしかないというふうには考えます。

いま各共和国の指導者から「今年の冬を越せるかどうか分からないから支援してくれ」とか、いろいろ声が掛かっているようです。けれども、実際モスクワで二か月間生活してみても、いま餓死者が出るような状況では全くない。むしろ今年の一月、二月の状態と比べて、食料供給も季節的な要因を考えても、それでも若干それに上乘せして改善しています。消費材に関してもコマーシャルショップに行けばほとんど手に入るし、むしろ大多数の国民がそれに手を出せないほど給料が安い、というのが問題なんです。

これは西側の供給で何とかなるような問題

ではないので、現時点では、この話を冷静に割り引いて聞く必要があると思います。つまり特定の政治家が特定の外国に行って何億ドル持ってきましたよ、ということをや国内の自己PRのために使おうとしている。そういう側面も無視できないわけですから、そういう話には乗ってはいけません。

もし、良い方向に事態が進んで、共和国間の合意が得られて、きちっとした中央政府ができて、こういうふうには市場経済に移っていきませんが、ただこれとこれだけ支援してください、という明確なプログラムによって裏付けられた支援の要請があった場合は、きちっとした受け皿があることを条件に、その時こそ支援を惜しまないでほしいわけなんです。ヤブリンスキーと話してみても、まだしばらくはソ連の国内で調整しなければいけないから、そんなに焦った行動にいま西側は出る必要はない、ということを言っているわけです。

良い方向に進んで行った場合、どういう支援が必要になってくるか、規模はどのくらいになるかという話ですけれども、これは実際にはやってみないと本当は分からないと思うわけです。ただ、一つ考えられるのは、経済同盟になって中央政府ができて、やはり共和国政府の発言力はかなりあるわけです。あと

はどちらが経済を実際に牛耳っていくのか。実力の勝負になると先ほど申し上げたんですけれども、そこでは特に通貨の問題が大事になってくると思うんです。

必要なルーブル安定化基金

単一通貨を保つのか、あるいは各共和国が独自の通貨を発行して、連邦とは別の通貨ができるのか。その辺はまだいろいろな考え方があろうです。私が大事だと思うのは、連邦の通貨がどんなものになるにせよ、それにまず優先的に交換性を持たせることです。

そのためのルーブル安定化基金と云いますか、それと似たような制度が必要になってくるかもしれません。ポーランドがズロチの交換性を導入した時に、確か十五億ドルぐらいじゃないかと思うんですけども、ズロチ安定基金というものを西側の借款で取り入れて、それをいざとなった場合に介入に使おうということだった。

これと密接に関連する問題ですけれども、ソ連はいま七百億ドル近い対外債務を抱えているわけです。もし共和国がみんなバラバラになってしまえば、どの共和国がどれだけこの債務を分担するか、肩代わりするかという話はいつまでたってもつかないと思うんです。そうなった場合には完全にデフォルトにな

ってしまうと思う。最悪の最悪になって連邦がなくなつたとしても、旧ソ連邦清算事業団というものでも作って、それが全部債務を引き受ける代わりに、西側からの金融支援を受ける。そういう形で、もう一度連邦が復活してくる可能性もあると思うんです。そういうことも考えて、西側もこういう話が出たらどういうふうに対応したらよいかを考えた方がいいのではないかと思います。

質疑応答

蕪沢（日経OB） エリツイン大統領の病状について何か情報をお持ちですか。

ブラギンスキー 特に情報は持っています。人が、そんなに健康状態が悪いとは思えません。狭心症ですから、心臓にトラブルを起すことは過去にも何回か緊張しすぎた後にあったんですが、しばらく静養していれば大丈夫でした。そんなに年もいっていないし、今回も大丈夫だと思います。

それよりも、最高会議に出たくなかったのではないのでしょうか。そういう気がします。彼が最高会議に出ないことは、全然おかしいことではないんです。彼は最高会議議長職を離れていま大統領ですから、大統領が最高

会議の審議に出なければいけない理由は何もない。

ロシア共和国の最高会議には、これはハスブラトフが言った言葉ですが、彼がいつも冷やかしている「ばかどもがいる」。最高会議議長代行がそういう発言をしているのかどうか分かりませんが、彼が言った以上は私もそれを否定する必要はないと思います。実際にそういう代議員が相当いるところに、エリツインが出ないということは、彼の政治的な立場が弱くなったのか、最高会議の立場が弱くなったのか。

これは今後の成り行きを見ないと分かりませんが、むしろエリツインはもう最高会議なんてかまっていられない、と判断したのかも。これからは大統領の執行権に頼って、しかも、ゴルバチョフは「非常大権」をなく奪われてしまったわけですが、エリツインはこの「非常大権」を依然として持っているわけです。議会にあまり縛られないで、自分の政治をやっていくという決意の表明であるかもしれない。

あまり日本のマスコミには出ていないことだと思いますが、クーデターの直後に、彼は非常に重要な措置を一つとりました。これまでは地方では改革に対する抵抗が非常に強かったわけですが、このクーデターがいっき

けになって、クーデター側を支援した、あるいは抵抗にちゅうちよした地方自治体の幹部を、エリツインはみんな更迭してしまいました。

新しい選挙が近々行われるとも聞いていますが、とりあえず彼は自分の代官を任命し、執行権を握らせた。要するに彼はロシア共和国の地方を全部押さえたわけなんです。ですから、エリツインは少なくとも狭心症で休暇に入る前までは、ロシア共和国の全土にわたってかなり強い権力を握っていたとみていい。健康状態さえ悪化しなければ、彼の実力が衰えることはないと思います。

むしろ、その行き過ぎを懸念する声が続いている。だからこそエリツインとゴルバチョフのバランスは絶対に必要だと考える人が多いわけです。エリツインが実質的に指導権を握っていても、彼に対するチェック機能、そして彼と他の共和国の指導者間との調整役として、ゴルバチョフの役割はまだまだ終わっていないと思います。

内藤 (NHKOB) ゴルバチョフとエリツインの関係がいまどうなっているのかを伺いたい。ナゴルノカラバフの問題でもゴルバチョフは全然出てこない。連邦の大統領としての調整役がいったいどうなっているのか。

もう一つは、経済の問題です。アメリカの見方には、今年の冬に暴動が起きるのでは、というのもあるようです。そんな深刻ではない、というお話でしたが、もう少し実情を詳しく伺いたい。

ブラギンスキー ナゴルノカラバフなど一部の問題では、ゴルバチョフは何年もかけてやったが、完全に失敗し、全くそれらの問題に関して権威を失っているわけです。炭鉱ストの問題などは今年の夏に解決しましたが、中央政府とゴルバチョフではどうにもならなかった。エリツインが自分の人気をかけて解決した。

ですから、ナゴルノカラバフもいままさにエリツインがやってみるべき問題だと思いません。それでも成功するという楽観的な見通しは立てにくいのですが、やるんだったら彼しかいない。ゴルバチョフはあの問題にこれ以上口出ししない方がいいと思います。

ゴルバチョフが調整の役割を果たしていくのは、もっとソ連のコアの部分だと思えます。例えばロシアとウクライナの関係、エリツインとクラフチュク・ウクライナ最高会議議長の関係、エリツインとカザフのナザルバエフ大統領の関係など、そうしたところでまだ彼の調整の役割が残っている。連邦の大統領と

してできるだけまくとめていく、そうした役割は残されていると思います。

二人の関係については、個人的には昔から確執があって、それぞれおん念があると思います。しかし、政治家としていまゴルバチョフは完全に自分の権力基盤を失ってしまったわけですから、エリツインについていかにざるを得ない。エリツインの方も最大の敵がいなくなったわけですから、連邦は維持した方がいいということを理解しているように思います。

ですから、「連邦維持」ということで、ゴルバチョフとエリツインの利害関係は基本的にはいま一致しています。彼らのそうした協調体制は、そう簡単には崩れない感じがします。この協調体制を続けることこそ、ソ連政治に安定をもたらす一つの重要な要因になると思います。

二番目のご質問ですが、今年の冬に暴動が起きないという保証はもちろんありません。ソ連で食料が豊富にあるにもかかわらず、店にほとんど出回らない最大の理由は、農民にそれを市場に持っていくインセンティブがないからなのです。マーケットメカニズムが早く軌道に乗れば、ポーランドでもそうでしたが、この問題は短期間で解決できます。しかし、それが遅れてしまえば、おっしゃるよう

な状況になってくるかもしれせん。

いずれにしてもインフレが起きることだけは明らかです。このインフレに反対して各地で集会やデモが開かれることはまず間違いない。ただそれが平和的に行われるのか、あるいは暴動になってしまふのか、そこがキーポイントになると思います。

昨年冬、そしてこの八月の事件で民衆が示した自制心、デモや集会は開くけれども暴力には訴えない、という非暴力的な方向で進んでいけば、それは一つの民主主義の自然なプロセスとして考えられます。終戦直後の日本でも労働者争議や学生騒動がありました。そういうことは、おそらくロシアでも避けて通れないと思います。

しかし、全く收拾のつかない混乱に発展しない、ある程度で収まるような、平和的に解決するような制度作りが大事です。非常に頼もしいのはソ連の実力が、国民の直接投票で選んだエリツィンの方に移ったということです。エリツィンの政策に反対しても自分達が選んだ大統領だから仕方がない、最悪の場合には次の選挙で彼を選ばなければいんだ、という法治国家、民主主義国家にとって当然の意識が、八月の事件で見る限り、かなり浸透しているように見えます。

それがさらに生活が苦しくなった時点で耐

えられるのかは、まだ見通しが難しいところですが。希望的な観測になるかもしれないけれども、まだしばらくの間は大丈夫ではないか。エリツィンが「我慢してくれ」と言えば、国民はそれに耳を傾けるだけの常識があると思います。

むしろ問題は、我慢してもらって本当に経済改革をやるのかどうか。あるいはそれが空中分解して我慢だけが残る、それが最終的に爆発することになるのかどうか。要するに、経済改革を実行に移すことが、最終的にはこの問題の解決の鍵を握っていると思います。

和田（テレビ東京） 二点伺いたい。

ハスブラトフ氏は無謀改革派なんですか。

というのは、ここでの会見で鼻息のすさまじさに驚かされました。いまのソ連では経済学者である前に革命家、あるいは権力闘争者でない、と考えていることを実行できないのか、と。エリツィン三人衆とか三羽鳥とかいっている人達でなければ、経済指導者としても通らないという状況だとすれば、その人達の属性が問題になる。無謀改革派がエリツィンを支える体制なのか。

もう一点は、明治維新の時いわゆる武士階級、なかんずくその中下層がそれまでのさまざまな特権を失いながらも、その後の日本の

市場経済の担い手になったという分析があります。ソ連も共産党のノーメンクラトゥラまでいっていない中下層の部分に、おそらく一番の人材がいるのではないか。そして中央の連携のある人達が集まっているのではないかと結局彼ら先駆者にしなくてはならないか。あるいはとも思いますが、いかがでしょうか。

ブラギンスキー 個人的な意見で、かなり主観的な見方も入ると思いますが、私はまず第一にハスブラトフは経済学者だとは思いません。彼は一応経済学博士の肩書きを持ち、政界に入る前は、政治経済学の先生をやっていました。しかし、ソ連における政治経済学の先生はご想像の通りです。要するにマルクス経済学を学んだということです。さすがにハスブラトフはマルクス経済学ではだめだと気がつきましたが、では別の経済学を知っているかとなると、それは疑わしい。

まともな経済学者は非常に少ないのが現状です。あえて名前を挙げれば、ヤプリンスキー以外にはベトラコフ、ヤーシンぐらいという感じですが。シャターリンでさえ、本当に経済を分かっているのかどうか、疑問に思うこともあります。

また、ハスブラトフがエリツィンの側近中の側近であるかよく分からない。どうもそう

でないような気がしてならない。エリツインの本当の側近とは、例えばスベルドロフスク州時代からずっと彼を支えてきたロシア共和国のブルリス国務長官とか、彼の顧問のシヤフライの名前がよく言われています。ロシア共和国最高会議の人達は、それほどエリツインに近いとは私は考えていません。間違いかもしれませんが、私の個人的な観察です。私もよく分らないのですが、エリツインは人の言うことをほとんど聞かない。少なくともすぐには反応しない。彼が本当は何を考えているのかよく分からない、と言っている人が多いんです。しかし、そうした中で、彼は勉強していますから、ある意味では期待も持てるような感じがします。

確かに無謀改革派が多過ぎるのは問題です。まともな政治家は私の目からみて、シェワルナゼ、ヤコブレフ、サブチャクです。相対に影響力のある政治家ですから、彼らが無謀な改革派の行き過ぎを牽制して、国を指導していく可能性も消えていないと思います。

二点目の質問については、いまの話と関連することですけども、おっしゃる通り、中堅幹部にこそソ連の最大の人材の資源があるわけです。それをうまく生かせるかどうかによって、改革の成否が決まるといっても過言ではないと思います。政治活動を盛んにやっ

てきた改革派は、破壊力としては非常にいい仕事をやってくれました。

しかし破壊した後には生産的なことや、創造的な仕事にとりかからなければいけない時点では、あまり頼りにならない。むしろ、表舞台にこれまで出ていなかった人達——結局クーデターの失敗も、こうした中堅幹部が古い権力を完全に見放していたという部分が非常に大きいと思いますが——そういった人達を積極的に活用して、新しい権力機構をつくっていくことが大事だと思います。

その点で、最近非常に期待が持てる動きもありました。例えばロシア共和国の外務省に日本課ができて、その初代課長に共産党中央委員会の国際部で日本担当主任を務めたサブリンさんが就任したんです。個人的にもよく知っている人ですが、頭が良くて視野も広くて、まさにおっしゃるようなソ連で最もいい人材の例であるわけです。

彼が共産党中央委員会にいたにもかかわらず、ロシア共和国の外務省が引き取ったということは、そういう点をロシア共和国が理解しているという一つの表れだと思います。一方ゴルバチョフの新しい報道官に、共産党中央委員会国際部のグラチョフ副部長が就任したことも、いい例の一つです。

ただ、そうした人達の間には、迷いが生じて

いる。どういう迷いかと言うと、ヤプリンスキーが言うような経済同盟がつくられて、そして中央政府の機能を支えるのが彼らの本音でしようが、もしそれが解体してしまったら、彼らも完全に宙に浮いてしまふ。だからといってロシア共和国の方に行こうか、となるわけです。そうした迷いが、サブリンはロシア共和国、グラチョフはゴルバチョフ、と判断が分かれたわけなんです。

そういうことがあるから、シェワルナゼもまだ表に出てくる時期ではない、と考えているようです。ペトラコフも市場研究所の所長をやって模倣倣めをしています。そうした模倣倣めの人材が多いわけで、共和国でやっていくのかあるいは連邦の再生に取り組むのかははっきりした時点で、そうした人材はどちらかに入っていくと思います。それは改革を下支えする意味では大きなことになると思います。

蕪沢 今度ゴルバチョフ大統領の政治諮問評議会にシェワルナゼ、ヤコブレフなど九人が入りました。ただ、そうした民主改革運動を進める人達が、政党をつくるという方向に行かない。改革する方がバラバラで、力があまり強くないように思うんですが。

ブラギンスキー 政党をつくらないのは、もしかして正解じゃないかと思っています。ほかの国はどうか知りませんが、少なくともソ連に関しては、脱政時代に入っていくのではないかという気がします。むしろ特定の政治家が政党をつくらないで、直接国民にアピールしながら運動していくのが一番いいやり方じゃないか。これもまた口火を切ったのはエリツィンでした。彼が昨年、第二十八回党大会で離党した時、別の政党をつくるには言っていないんです。むしろロシア共和国最高会議議長として、国をまとめる役割を果たさなければいけないので、どの政党にも属することはできない、ということを行っている。このメッセージは非常に大きかったと思います。ですから、いま民主改革運動がまた会議をやって、ポポフ（モスクワ市長）が政党をつくりましようと言ったのに対して、当分の間は政党をつくらないでいこうというのはある意味で正論です。ちなみにポポフはあまり理性的でない改革派の典型的な例だと思っています。しかし、戦術はうまい。世渡りがうまく、人材の選び方もノーメンクラトゥラを取り入れるという意味で、非常に巧みにやっています。しかし考え方と行動にいろいろ問題があると、私は感じているんですが…。

ともかく、シェワルナゼ、ヤコブレフ、ペトラコフらはそのアイデアは支持しないで、当分の間は政党をつくらないで幅広い運動をやっていこう、と言った。私はある意味で正論ではないかという気がします。

言い過ぎかもしれませんが、日本を始めとしてほかの国も、脱政時代に入っているんじゃないか。果たして日本の政治に政党が果たす役割はどういうものでしょう。自民党が果たす役割は大きいかもしれませんが、それも政党というよりは、特定の派閥のリーダー、個人の政治家を中心に動いているような気がします。

社会党が本格的な野党に脱皮するためには、政策的な対案を出さなければいけないと言いつつ、何も出せない状況にあるわけですが、もともと発想自体に無理があるような気がしています。

国民が政党に分かれてまとまって行動する時代は、去りつつあるような感じがします。これだけ個人の教育水準が高まった時点で、それを一つの政党にまとめて、みんながよりどころを見いだすような時代は、去りつつあるのではないか。もしかしたらその点では、ソ連がいま世界の最先端をいっているかもしれません。

平野（毎日） ソ連経済を論じる場合、南北問題が非常に大切だと思います。いままでのソ連の経済改革のお話は、北の方、ロシア共和国を中心に論じているわけです。しかし中央アジアの共和国は非常に貧乏で、失業者が多い。クーデター後もロシア共和国が連邦の財産を接収したことで、ほかの共和国から非難を受けたりしているわけです。こうした問題を今度のヤプリンスキー案の中でどうとらえているのか。ロシア共和国が南の共和国をどう育てていこうとしているのか。

ブラギンスキー ヤプリンスキー達がつくった経済同盟条約草案の最初の部分に、「経済改革はすべての共和国が同じようなペースでやる」と明記されています。私有財産と自由競争の基本原則をすべての共和国が合意しなければいけない。労働力、資本、商品の流れを自由にするという意味で、自由な参入を認める。要するに後進共和国を半ば強制的に先進共和国にペースを合わせる形で、経済改革の波及を狙っているわけです。

それを一部の中央アジアの共和国の指導部が、非常に強く懸念している。例えばウズベク、タジク、トルクメンでは経済的に連邦なしではやっていけないことは目に見えています。それでもなお、旧共産党の指導部が

権力を維持したいものだから、あまり表には出さないけれども、実際にはベルリンの壁みたいなのをつくらうとしている。

ウズベクの場合は、ロシアから来た報道陣を追い出したり、いろいろひどいことをやっているわけです。それでも彼らを連邦の中に巻き込んだ中央政府ができれば、こうした共和国に対して半ば強制的にロシアと同じような経済改革を押し付ける形になるでしょう。

各共和国がバラバラになってしまえば、これらの共和国はおそらく従来のような前近代的な社会の枠組みにとどまって、より一層窮乏化することになると思います。ですからそういう点で、ソ連の改革派のエコノミストは、連邦の維持は南の共和国の発展にもつながら、という考え方でやっていると思います。私自身も考え方も基本的には同じです。

小林（共同OB） ソ連の生産が非常に落ちていきますので、当然失業者の問題につながります。それに、四百万という軍隊を半減するとすると、この軍隊に属した人達も失業者になるのではないかと。また、難民となって西側にかかり流れていくのではないかと。この点は、現在どのような状況ですか。

ブラギンスキー 難民の問題についてです

が、もし七十四年前のような内戦状態に突入してしまえば、大量の難民が発生します。しかし、正常な国家機能が保たれている限り、西側の移民政策次第だと思います。ビザを出さなければいいだけの話ですから。パスポートも持たないで国境を越えていく、というようなことはないんじゃないかと思えます。

失業者の問題に関しては、連邦政府であろうと共和国政府であろうと、ケインズ案の対策をとるべきだと思えます。要するに公共事業をやる必要がある。しかもソ連産業の発達には、あるいは西側の民間投資に大きなポトルネットワークになっているのが、インフラストラクチャーの問題です。道路、港湾、空港などです。これこそまさに、公共事業としてしかやれない仕事なわけです。

ですから、こういう大量の失業者が生まれているということは、ある意味ではソ連が必要としているインフラストラクチャーの整備、公共事業をやるための絶好のチャンスでもあるわけです。国防予算を五割とか七割削れ、という話も出ています。その資金を公共事業に回してしまえば、ソ連の資金だけでも何とかなりします。

西側も潜在的な難民問題を考えると、インフラストラクチャー整備のためにソ連の公共事業に金融支援を行うことによって、失業者

を吸収できる。しかも長期的にみてソ連の経済発展の基盤をつくるような公共事業をやったら、マイナスの面をむしろプラスの方向に転換していくことができると思います。

福島（共同） 今回のクーデターはいろいろな国のクーデターと比べると、言ってしまうと本当はクーデターだったのだろうかと思わざるを得ないような非常に変なことがいっぱいありました。

もし本当にクーデターをやったとすれば、ピストルを持っていくなり、ヘリコプターから爆弾でも落とせば、ゴルバチョフを殺すことができたでしょう。この点についてどのように考えますか。

ブラギンスキー 私は先ほど言いましたように、今回のクーデターは基本的には裏はなかったと思っています。要するにゴルバチョフを殺すほどの勇気がなかったということです。八月十九日に健康上の理由で辞任と聞いた時、私はゴルバチョフは暗殺されたのではないかと思ったんです。結局彼らはそこまでの勇気がなかった。

確かにクーデターの警告はありました。シエワルナゼが昨年十二月に警告していますし、何回もクーデターの警告をゴルバチョフは受

けていたんです。最後の最後まで自分の側近を信じていた、と彼自身も言っています。その言葉を額面通り受け止めていいんじゃないかと思えます。要するにKGBと彼の側近中の側近だったボルジン官房長を完全に信頼して、その人達が与えてくれる情報を信じていたんじゃないか。

そして、このクーデターに軍がのらなかったら、つまりヤゾフが同意しなかったら、そもそも成立する見込みがなかったわけです。ヤゾフについてはヤコブレフですら、「彼がクーデターに手を貸したことは意外で、全く信じられなかった」と言っています。職業軍人で、しかも第二次世界大戦中、戦場の将校でした。その人がいったん忠誠を誓った大統領を裏切れることは絶対にないとみんな思っていたわけです。

ゴルバチョフもおそらく完璧に彼を信じていた。ヤゾフが「ノー」と言えばそれまでの話ですから。クーデターが準備されているという警告を受けながらも、自分が任命した国防大臣とかKGBの議長を信じて、この警告に耳を貸さなかった。

クーデターの府に落ちない点で、もう一つエピソードを紹介します。

モスクワから二百キロほど離れた郊外にウラジミールという古い町があります。そこに

ロシア内務省直属の指揮官学校があって、八月二十日、エリツインから「ホワイトハウス防衛のために出動しろ」という命令が届いた。支度をしていたところ、隣の基地から戦力でははるかにそれを上回る軍隊がやってきて、「われわれはあなた達の出動を阻止する命令を受けた」と言う。そして「一応ここで陣を張るけれども、もし実力で突破するつもりだったら抵抗しない」というようなことを言っただけです。

エリツインの逮捕命令もクリュチコフが出していたわけで、逮捕しようと思えば別荘でもできたし、別荘からホワイトハウスに向かう途中でも、流血なしにできたわけなんです。ところが、このKGBの担当者のお話では、彼らは一応命令を受けて出動したけれども、結局エリツインを見送っただけだったということなのです。

要するに決定的な行動に中堅幹部が出なかったことが大きかった。ですからヘリコプターから爆弾を落とせという命令があっても、ヘリコプターを飛ばす人がこの命令を実行しなければいけないわけで、そういう命令を受けたときに果たしてそれを実行したのかどうか。そのへんは大いに疑問です。クリュチコフとヤゾフが自分達の部下の気持ちすら、全く分かっていなかった。彼らの命令が実行に

移されないとところに、今回のクーデターがあっけなく崩れた一つの大きな原因があると思えます。

(文責 編集部)

セルゲイ・ウラジミロヴィチ・ブラギン
スキー氏略歴 一九五九年モスクワ生まれ。
八二年モスクワ大学卒。八五年ソ連科学アカ
デミー東洋学研究所付属学院卒。八五年以降、
ソ連科学アカデミー東洋学研究所の初級研究
員、研究員、上級研究員などを歴任。八八年
十二月から八九年二月までは、慶応義塾大学
客員研究員。九一年四月から横浜市立大学商
学部専任教員(助教授)。著書に『ソ連経済
の歴史的転換はなるか』(共著 講談社現代
新書)。